

近世前期江戸町復原地図の作成過程および その問題点について

玉井 哲雄

はじめに	Ⅰ. 「寛永期江戸下町図」
Ⅰ. 「江戸周辺の地形および中世末期江戸 推定図」	……成立期の江戸町地
……中世末の江戸湊周辺の地形につい て	Ⅲ. 「寛文・延宝期江戸町地分布図」
	……江戸町の発展過程 おわりに

はじめに

江戸町地の復原地図作成、およびその経過報告がこの報告書の主要な内容である。江戸町の中でも最も中枢を占めていた江戸下町地区の復原に関しては、中村静夫氏が、1850年前後の嘉永期を取り上げて長年の蓄積に基づいた詳細な復原図を作成された。また、その作成の経過報告がこの報告書の中で行われている。私は私自身の問題関心に従って、従来必ずしも確かな復原地図が作成されていなかった江戸時代前期の江戸下町、および下町を含む江戸全体の江戸町地を示す復原地図の作成を目的とした。ただし、残された史料の比較的少ない近世前期の江戸を取り扱ったため、様々な制約から復原の精度は必ずしも十分なものではない。むしろ、ここでは今後のこのような江戸時代前期の江戸の復原的考察を行うための基礎作業として考えることにしたい。

ここに作成した復原地図の時期および地域としては、

- (1) 中世末期の江戸城、江戸湊およびその周辺
 - (2) 寛永期を中心とする17世紀前期の江戸下町地域
 - (3) 寛文・延宝期を中心とする17世紀後期の江戸町地の全体、
- を考えた。この3種類を選んだ理由は、基本的には近世的発展を遂げる以前の江戸町の原型をあきらかにしておきたいということ、そして江戸町発展の大きな画期である1657（明暦3）年の明暦大火の前と後の江戸町を確認し、この間の変化の内容をあき

らかにしておきたいということである。さらに付け加えるならば、中村氏作成の1850年頃の下町復原地図とあわせて、これらの地図を総合的に見ることによって、江戸時代における江戸町の全体像が描き易いようにと考えた結果でもある。

以下、これらの復原地図作成の前提として考えていたこと、および作成の過程で考えたことなどをそれぞれの図について記しておくことにする。

I. 「江戸周辺の地形および中世末期江戸推定図」

——中世末の江戸湊周辺の地形について——

江戸町方の中心である江戸下町がどのようにして成立したかという問題は、その基本的な性格を考える場合に重要な意味を持つ。しかしながら、その具体的な形成過程をあきらかにすることは、文献史料が少ないこともあってかなりの困難がともなう。何より形成過程を考える前提となる、中世末期の江戸およびその周辺の地形の具体像がよくわからないことが大きな理由である。そこで、まず中世末期江戸推定図の作成を試みることにした。

(1) 復原の史料および方法

1590(天正18)年に徳川家康が入府して大規模な土木工事をを行う以前の、いわば中世江戸については、その具体的な地形を窺わせる史料は非常に乏しい。15世紀半ば、太田道灌が江戸城を築城した当時の江戸を伝えるという『長録江戸図』などが地図としては知られているが、これらは後世になって作られたある種の想像図のようなもので、その内容は江戸の地形復原の史料としてはとても使えるようなものではない。また当時有数の文化人でもあった道灌のもとを訪れた禅僧が江戸湊のことを描写した詩文が残されているが、これとて文学的な誇張を割り引いてみても、江戸湊がかなり賑わっていたらしいという雰囲気はかなり窺わせてくれるものの、具体的な地形を知るための史料としてはどうしても限界がある。

このように絵図および文献史料のみによる、中世江戸の復原的考察の可能性にはあまり大きく期待することはできないであろう。しかし、近年、東京において都市再開発などに際してさかんに行われるようになった考古学的な発掘によってもたらされた、東京の地下に残された遺跡ないし遺構という史料の活用による復原的な考察には今後大きな期待を寄せてもよいように思われる。またこれも近年研究の蓄積が行われつつある、全国各地の中世都市の復原的な考察も、中世都市江戸を考える場合の重要

I. 「江戸周辺の地形および中世末期江戸定推図」

な手がかりになると思われる。これらの手段を総合的に考えることにより、文献史料の再検討もふくめて、中世江戸の復原的考察の可能性はまだまだ広がると考えられる。

ただし、ここでは総合的な方法の前段階として、現在確認できる江戸ないし東京の具体的な地形等を考察するという方法でとりあえず中世江戸を復原的に考えてみたい。このような地形ないし地質的な視点を導入することにより、中世江戸を復原することは、早く『千代田区史』⁽¹⁾の中で既に行われており、その部分を担当された鈴木理生氏によって、その後も考察が進められている⁽²⁾。特に東京都心部の各地で行われている工事現場の地質状況の観察、および東京地下の基礎地盤の状況を示すボーリングデータなどを根拠にした中世末の海岸線などの復原的な考察は十分に説得力があり、私のここでの考察も基本的にはこの鈴木理生氏による研究に依拠する部分が多い。ただしここでは多少観点を変えて復原地図作成を行うことにした。

ここに示した図・1「江戸周辺の地形および中世末期江戸推定図」の基礎にした海岸線および堀などの地形は、明治10年代に内務省によって測量作成された『五千分考実測図』(以下、内務省図と略す)を用いた。この図は近代的な測量に基づいた地形の信用できる大縮尺の最初の地形図と考えてよく、また近代の大きな土木工事の行われる以前の、ほぼ近世末の江戸の状況を伝えていると考えられるからである。この地形の上に、国土地理院作成の一万分の一の地形図の等高線をおとした。この等高線の方は現在の地形のものであり、江戸時代から現在までの間にはかなりの変化があったと考えられないわけではないが、現在の東京中心部の精度の高い等高線の資料として、容易に入手できるものとしてはこれが最も確かなものであり、明治以後の土木工事の状況などを考慮に入れることによって、ここでの考察には十分役立つと考えたからである。この地形および等高線が以下の考察の基礎である。

(2) 中世末地形の推定

このようにして作成した地形図の上で行った作業は、大きな川の流路の推定で、墨田川の位置に大きな流路があったことはもちろんであるが、それ以外に石神井川、平川、古川という3本の川については、等高線および近世以後の状況から図のように考えて大きな間違いはないであろう。海岸線についてはここでは鈴木理生氏が積極的に採用されている地下の地盤についてはあえて取り上げず、現在の地形図から読み取れる、4mの等高線の位置を基本的な手がかりとして用いた⁽³⁾。これによれば、北西の駿河台方面から続く台地が日本橋の北まで伸びてきており、石神井川の河口となってい

る伊勢町堀および掘留町入堀の位置が低地になっていること。京橋北側の一郭および銀座南側の一郭に微高地があること。さらに江戸城本丸下から南にほぼ一直線に4mの等高線が続くことなどが注目される。これらの事実から、図に示した様な海岸線を推定した。鈴木理生氏などによって既に示されている江戸湊、日比谷入江、そしてその間の江戸前島の存在が想定される。

なおここで街道を推定したのは中世江戸城と、中世段階で既に存在していた浅草寺、品川宿などの要地との交通路の存在の想定を基本にしている。それらの中でも浅草寺は奈良時代に起源があるといわれ、中世には門前かなりの集落があったと考えられ、江戸よりは早くから発達していた集落であった。したがって、この浅草寺とを結ぶ街道が江戸にとっては最も重要であったと考えられる。そのように考えると、この街道にむかって入り込んでいた入江にあったと推定できる江戸湊が中世末江戸繁栄の中心部であったという想定ができるのではないだろうか。

Ⅱ. 「寛永期江戸下町図」

——成立期の江戸町地——

17世紀初頭の寛永期は、江戸時代の江戸を考える場合には重要な時期の一つと考えられる。江戸城の建築および城郭が一応の完成をみたのがこの寛永期であり、徳川幕府による全国支配の権力が基本的に固まった時期である。江戸という都市の発展過程からみた場合にも、明暦大火後に大きく膨張する以前の、領主徳川氏が意図したであろう当初の城下町としての都市構造を示しているのがこの寛永期の江戸ということになるだろう。

(1) 復原の史料および方法

寛永期の江戸を伝える江戸図として、通称「寛永江戸図」と呼ばれている『武州豊嶋郡江戸庄図』が知られている（以下、寛永図と略す）。ただし、現存するものは寛永九年の年記のある刊行図の写しであり、刊行図そのものの存在が現在のところ確認されているわけではない。したがって、寛永期に実際に作成されたものではないという考え方もあり、史料としての信憑性に全く問題がないわけではないが、ここではその史料としての内容を吟味するための作業、という意味も含めて、その江戸図としての内容を、あえて江戸の地形の上で検討してみた。なお、寛永図に描かれた範囲は、江戸城全域および周辺部をも含むある程度広いものであるが、ここで地形を復原する

のは中村氏の図との比較ということもあり、江戸下町の範囲に限定している。また『武州豊嶋郡江戸庄図』以外にも「寛永図系」ないし「寛永図群」と総称される、ほぼ同内容の江戸図が知られており、ここではそれらの内容も復原の史料として用いている。⁽⁴⁾

実際の復原作業は図・1と同じように、内務省図を地形の基本図として用い、その上に寛永図の記載内容を照合しておとすことによって検討するという方法をとった。実際の、図・2「寛永期江戸下町図」に示したように、この作業の過程で大筋において内務省図の示す地形と寛永図の内容との間に、堀の形態、基本的な街路構成など大きな矛盾があるわけではない。特に注目すべきは、寛永図全体の描写範囲の長方形を内務省図上で確認すると、ほぼ同様の歪みのない長方形になり、寛永図は江戸城天守閣が描かれるなど絵画的な表現があるにもかかわらず、全体的には地図としてかなりの精度で描かれていることになる。

しかしながら、寛永図の記載の解釈が難しい場所も実際にはかなりあった。特に、街区の表現が後世の江戸図などから確認できる地形とは異なっている部分があることは重要と考えられる。初期江戸町の町割は、京間60間四方の正方形街区が基本となっていたことは間違いないとみられるが、現実にもこのような正方形街区が存在したのは、本町通り、日本橋通りなどの主要街道沿いの部分に限られていた。ところがこの寛永図においては中央部に会所地という空地をとった形での正方形街区が、なかったはずのやや周辺部分にも強引に描かれている場所がかなりある。この復原図上では一応寛永図にしたがって、会所地部分は書き込んであるが、街区は内務省図の地形に従う以上、正方形にすることはできなかった。このことから逆に言えることであるが、この正方形街区により、「寛永図」の地形表現が部分的にはかなりゆがんでいることになっていると思われる。つまり、寛永図は正方形街区をかなり意識して無理をしてまで描いているということになるのではないだろうか。この事実は初期江戸町における正方形街区の意味を考える一つの手がかりになる可能性があると思われる。

なお、町地関係の地名町名、および人名は、原則として寛永江戸図のものを記したが、一部寛永図系の図を参考に補っている。町地に注目するという図の目的から武士関係はここでは取り上げず、寺院名も主要なもののみを記した。

(2) 寛永期江戸町地の特徴

このような寛永図によって推定される寛永江戸町地の特徴を上げていくなれば、

- ① 築地の大部分がまだ海の下であることを示されるように、陸地になっている部分

が後の江戸に比較するとまだまだ少ないということで、埋立過程の江戸町の状況をよく反映している。このことにより、江戸町があくまで埋立で成立したという事実があらためて確認できることになる。

- ② この埋立進行中という事実と無関係ではないが、堀が非常に多いことである。元吉原も堀によって完全に囲われているように描かれている。これらの堀は楓川から東海道にむかって入り込んでいる8本の舟入堀をはじめとして、舟運ないし荷上げのための堀がほとんどであろう。特にほぼ中央の中堀が日本橋通りを越えて江戸城の内堀まで伸びていたということは、この地区の性格から考えて注目に値する。これらは未曾有の大建設期であったと考えられる初期江戸の舟運の重要性を物語ることはもちろんであるが、寛永期の江戸町の繁栄を描いたとされる『江戸風俗図屏風』⁽⁵⁾の、水際の遊興場面などの描写内容の検討などにも重要な意味を持ちそうである。また
- ③ 道三堀、ないし江戸城内堀に面した位置にも町地がある。これらの場所は後には武家屋敷になってしまい町地は消滅する。しかもこれらの町地には他と異なり、寛永図では「町屋」とのみ記されて町名が付けられていないことも重要であろう。これは実際に町名がなかったのか、それとも何らかの理由で記されなかったのか問題は残るが、初期江戸町の性格を考える場合に重要と考えられる。
- ④ 寺の占める部分がかかなりの広さになるということである。明暦大火後にはほとんどが移転してしまい、この下町の範囲から寺は消えてしまうのであるが、それ以前の状態を示していることになる。ただ注目すべきは、寺の位置である。八丁堀や霊岸島などの埋立地、そして後の本町通りからは裏に入った、おそらく当時としては整備が行われていない荒れ地に寺があったということである。これらの寺の位置は、近年の発掘により墓地が確認されており、寺として江戸の住民の菩提寺として意味を持っていたことは確認できる。⁽⁶⁾

ともかく、部分的には不明の部分もないわけではないが、この寛永図による復原図は全体としては初期江戸の様相をかなり伝えていていると考えてよく、今後さらに検討を加える必要があるであろう。

Ⅲ. 「寛文・延宝期江戸町地分布図」

——江戸町の発展過程——

1657（明暦3）年の明暦大火後に、江戸は飛躍的に拡大発展することになるが、特

に著しいのは17世紀後半の、いわゆる寛文・延宝期にかけてであり、18世紀初頭の享保期頃までには外側に向かっての拡大膨張の傾向は、ほぼ落ち着いていたと考えられる。ここではこのような拡大が一段落したと考えられる寛文・延宝期の江戸町地を江戸全域の中にあえて図化することを試みた。この時期の江戸こそが、18世紀以降の巨大都市江戸の原型であり、江戸全体における江戸町を考える場合にも重要であると考えたからである。

(1) 復原の史料および方法

この図・3「寛文・延宝期江戸町地分布図」の復原史料として用いたのは、まず1670年（寛文10年）に刊行がはじまった、通称「寛文五枚図」と呼ばれている『新板江戸大絵図』である（以下、寛文図と略す⁽⁷⁾）。この寛文図は明暦大火後の実測に基づいたといわれ、その地図としての表現も、京間5間を1分に表した、縮尺3250分の1の、非常に正確な地図である。おそらくこの寛文図によって、はじめて江戸の正確な地形が表現されたといつてよいのであろう。

ただし、この寛文図だけでは、町地に関しての情報が必ずしも十分とはいえない。そこでちょうど10年後の延宝8（1680）年に刊行された『江戸方角安見図』をやはり復原史料として用いた（以下、安見図と略す）。この安見図は、当時の江戸全域を78枚の図に分割して、乾坤2巻の冊子にしたもので、アトラス形式の江戸図として知られている。重要なのは各図の歪みや縮尺の違いがほとんどなく、コピーして貼り合わせるとほぼ完全に江戸全体図が復原できることで、各図毎の変形や縮尺の不統一のため、全体図の復原が事実上不可能な後の江戸切絵図とは大きく違い、江戸の地形復原の史料としての利用価値が非常に高いということである。

寛文図と安見図との関係は非常に密接であると考えられ、現実に街路の表現などはほとんど一致し、その地図として描いた範囲も、本所の東側、芝の南側、牛込・四谷の西側など周辺部では、寛文図よりも安見図の範囲が広がっているが、全体的にはほぼ一致するといつてよい⁽⁸⁾。ただ、ここで問題にしている町地の表現についてみると、ただ単に町名が書かれているだけの寛文図に比べて、安見図は街区周辺の街路沿いの部分を太く表してあり、より丁寧である。この「寛文・延宝期江戸町地分布図」ではこの安見図の町地の表現をほぼそのまま踏襲することにした。この部分に実際に町家が建ち並んでいたかどうかはわからないが、後の江戸図からあきらかになる町地の範囲と照合しても、町地の分布としてはほぼ間違いはなく、これで全体的なおおよその町並状況は表しているとみられる。

なお、町地の表現以外に寺社の位置を大よその寺域として表現した⁽⁹⁾。これは江戸全体の都市としての構成を考える場合にはやはり寺社の位置が重要であると考えたからである。また、武家地については寛文図、安見図ともに表現している辻番所をこの図でも表すことにした。当時の江戸の都市構造を考える上で重要と考えたからである。

実際の復原作業は、この場合も内務省図を基礎に寛文図、安見図の情報をのせていくという手法をとったが、中心部の碁盤目状の規則的な街路はもちろん、周辺部のかなり曲がりくねった必ずしも計画的ではない自然発生的と考えられる道まで含めて、本所・深川地区を除いて非常によく一致した⁽¹⁰⁾。また内務省図と寛文図ないし安見図の範囲もだいたい一致しており、この寛文・延宝期に出来上がった江戸の構造がその範囲までも含めて基本的には明治の東京までも規定していたことになる。

なおこの図・3では、印刷の関係で、ほぼ寛文図の範囲を図にしており、安見図であきらかにできる周辺部の一部はカットしている。基本的な地形は地図としてより正確と考えられる寛文図を基本とし、一部不明の部分などを安見図で補った。地名・町名はより情報量が豊富な安見図の内容を主に用いている。

(2) 寛文・延宝期江戸町地の特徴

この寛文図および安見図によって推定できる寛文・延宝期の江戸町の特徴をまとめておくならば、

- ① 基本的なことであるが、初期の江戸町に比べて都市としての規模が飛躍的に大きくなっていることである。寛永図にほぼ表現された江戸城の外堀および神田川、新橋川、そして墨田川によって囲われる本来の江戸、これを仮に「原江戸」というならば、この原江戸の範囲がほぼ半径2kmの円内におさまるのに対して、拡大部分はその外周部を約3km幅でめぐっており、全体として拡大後の江戸は半径約5kmほどの大きさで、面積的には数倍になっていることになる。
- ② 構造的にみるならば、原江戸と拡大部分が構造的にはっきりわかれていることも注目される。これは町地の分布を見るとあきらかであり、江戸下町と呼ばれる内神田、日本橋、京橋の本来の江戸町は江戸城および周囲の武家屋敷とともにまとまった城下町である原江戸の重要な構成要素であるのに対して、拡大部分の町地は江戸を中心に放射状に伸びる東海道、甲州街道、中山道、奥州街道などの街道沿いに線上にあるものか、やはり分散した寺院の門前に散在しているのみであり、面積的に小さいことはもちろん、機能的にも原江戸である中心部分と周辺部を結び付ける補助的な役割にしかすぎないといってよいのではないだろうか。これは拡大後の江戸

が中心部と周辺部という、原江戸と拡大部分にはほぼ対応するはっきりと分かれる二重の構造を持っていたとあってよいのであろう。この事実は江戸の都市構造を考える場合に重要な意味を持つ。

- ③ 拡大した江戸の最も外側の外縁部については、その都市としての部分と外側との境界が必ずしもはっきりしない。これは江戸周辺部が武家屋敷に占められており、この復原図では表現していないということだけではなく、寛文図や安見図をよく見ても、例えば西洋都市に見られるように城郭や堀などではっきりと区分されるという事実はなく、外側に広がるいわば田園地帯とは連続的につながっていたということになる。これは必ずしも江戸に限ったことではないが、日本の都市の本質を考える場合に重要な問題であろう。

おわりに

——江戸下町の形成過程——

以上、3種類の復原図の解説を行うとともに、それらによって江戸町地の変遷過程を概観した。あらためて江戸町の中心であった江戸下町に注目するならば、寛永期以降、江戸下町はその形態をみるかぎり基本的には大きく変わっているわけではない。しかしながら、江戸の市域の拡大とともに、その江戸全体における役割、そして意味は大きく変わったとあってよいであろう。中村氏の詳細な復原図に示されているその内部構造の意味も、都市全体の変化の中で十分に検討する必要があると思われる。

必ずしも精度の高い復原とはいえないかもしれないが、このような形で江戸時代前期の江戸町地の復原図を作成することができた。最初にも述べたように、江戸の復原図に基く都市史的な考察はまだまだ基礎作業の段階であり、これを機に江戸町の研究がさらに進展することを期待したい。

註

- (1) 千代田区役所『千代田区史・上』1960年刊
- (2) 鈴木理生『江戸の都市計画』1988年、三省堂
- (3) 地下地盤の資料収集そのものが十分ではなく、またその解釈が現在の私にとって困難であるということもあるが、ここで試みる中世末の地形推定には、非常に長い時期の自然の変化の痕跡である地下の地形よりも、現在にまで残されている地上の地形の方が近世初頭以降の土木工事を考慮に入れても、むしろより有効であると考えた。
- (4) 飯田龍一・俵元昭『江戸図の歴史』1988年、築地書館
- (5) 『江戸風俗図屏風』出光美術館蔵
- (6) 都立一橋高校内遺跡調査団『江戸—都立一橋高校地点発掘調査報告—』1985年

近世前期江戸町復原地図の作成過程およびその問題点について

東京都中央区教育委員会『八丁堀三丁目遺跡』1988年

- (7) 遠近道印作，寛文10年から13年の間に全5枚が刊行される。最初に出た江戸城を含む中心部のものが『新板江戸大絵図』，残りの4枚が『新板江戸外絵図』と題されている。前記(4)参照。
- (8) 前記(4)『江戸図の歴史』では寛文図と安見図が同じ遠近道印作という見解をとっている。
- (9) 寺院神社の領域については寛永図，安見図とも正確に表現されている場合はまれであるので，ここではおおよその範囲を色で示している。
- (10) 本所・深川については17世紀末の元禄期に大幅に町割が変更されており，内務省図の街路と，寛文図・安見図の街路とは一致しない。この事実は従来ほとんど注目されていないようであるが，本所・深川地区の地域的特質を考える場合には重要な意味を持っていると考えるが，ここでは論じることができない。稿を改めたい。

(千葉大学 工学部)

Historical Urban Map of Edo in 17th and Early 18th Centuries
—Process of Establishment and Some Problems—

TAMAI Tetsuo

Conventional restoration map of the urban area of Edo where people in general dwelled in the 17th and early 18th centuries thus far made cannot be considered as very precise. As for the town of Edo in the latter half of the Edo period after the last half of the 18th century, such maps as “Edo-zu” and “Edo-Kiriezu” have been published in many copies, and related documentary records have also been preserved. As we can see in the restoration map of Edo around the 1850s that NAKAMURA Shizuo this time established to a considerable degree of precision, this sort of maps can be established with substantial accuracy. On the other hand, however, there hardly remain historical literature concerning the town of Edo in the first half of the 18th century and theretofore, which naturally limits the precision of possible restored map.

The reason why the author attempted to establish a reconstructive map of Edo as a whole including its “Shitamachi” tracing back to the first half of the Edo period in spite of such historical restriction is that he thought it indispensable to do this as a basic work which would be much significant in the study of the History of Edo as a town.

The periods and the regions of the restored historical map this time prepared are as follows:

- (1) Edo Castle and Edo Port at the very end of the medieval ages and their circumferences;
- (2) The “Shitamachi” area in Edo around the Kan-ei era (first half of the 17th century); and
- (3) The town of Edo as a whole around the Kanbun and Enpou eras (last half of the 17th century).

The reasons why these three were chosen are:

- (a) To confirm, at least once for all, the prototype of the town of Edo, and to verify the positive transfiguration of the town after the disastrous fire

in 1657 (the third year of Meireki);

- (b) To clarify what was Edo at the first half of the 17th century (the Kan-ei era), which is considered to represent the scale of the castle town the Tokugawa clan intended initially, and
- (c) finally to elucidate what really was the town of Edo in the last half of the 17th century (the Kanbun and Enpou eras) as a result of the expansion and development after said big fire in the Meireki era.